政　治　セ　ッ　シ　ョ　ン

和諧社会と開発政治

◆

座　長
加々美光行（愛知大学）

報告者
金観濤（政治大学）

劉青峰（香港中文大学名誉研究員）

許紀霖（華東師範大学）

張玉林（南京大学）

毛里和子（早稲田大学）

加々美光行（愛知大学）

コメント
臧志軍（復旦大学）

張　琢（愛知大学）

◆

2008 年 12 月 6 日（土）

○司会　先ほどの環境セッションは、午前中の経済セッションとは違いました。午前中はばたばたして何か一秒を争うような雰囲気でしたが、中国の経済発展そのものの雰囲気が伝わってきました。また環境セッションでは、何か司会をされた先生を見ても、落ち着いて話している感じで、さすがに経済と環境の温度差を感じる次第です。

午後の政治セッションは、おそらくもっと深刻な問題がいろいろとあると思いますので、座長の加々美先生にバトンタッチいたします。ではよろしくお願いします。

○加々美　環境セッションが真ん中にきたために、政治セッションが一番隅に置かれるという、軽視されているとは思いませんが、このセッションでは、かなり挑戦的で論争的な観点を提起することになると思います。

ここにお座りの皆さん方の書かれている論文を事前に読みましたが、相当論争的な中身を含んでいます。

実は時間が１人 15 分しかありません。環境セッションでは 20 分ありましたが、15 分しかありません。私の話は、あとで発言の機会もありますので、司会としてはなるべく禁欲しようと思います。

最初に、お座りの各パネリストをご紹介申し上げます。最初に金観濤（JIN Guantao）先生です。金観濤先生は、ご存じのように 1989 年、天安門事件のときの、ある意味では最も論争的な論者の１人でした。単に研究者というだけではなく、いろいろな意味で、中国に影響を与えてきた方です。天安門事件のあと、香港中文大学に長くおられまして、現在は香港中文大学を定年退職され、台湾の政治大学で講義をされています。

続いて、劉青峰（LIU Qingfeng）先生です。劉青峰先生も金観濤先生と同じように、1989 年、天安門事件のときに、中国社会に大きな波紋を投げかける論争を提起された方です。実は、金観濤先生とはご夫婦です。その後、一緒に香港中文大学に移られました。それから一番、その意味では影響力が極めて高い雑誌『二十一世紀』という雑誌が香港にありますが、その編集長（zong bian ji：総編緝）をずっとやってこられています。

続いては、許紀霖（XU Jilin）先生です。許紀霖先生は、華東師範大学の先生です。とりわけ 1980 年代に文化熱がかなりありました。いろいろな文化界の論争家が、さまざまな論争をしましたが、それは実際、中国の政治に非常に大きな影響を与えました。その１人の論者がここにおられます金観濤先生や劉青峰先生ですが、許紀霖先生は、そのあとの世代と言ってもいい世代です。1990 年代以降、論壇に現れ、『読書』という雑誌を中心に、さまざまな論争を提起されてきた方です。ご存じのように、新左派や新自由主義といった論争の最も渦中におられた方です。

続いて、張玉林（ZHANG Yulin）先生は、京都大学の博士を取得された方です。日本留学の長い経験をお持ちで、日本語ものすごく熟達したものがあり、私の難解な著作を翻訳いただきました。残念ながら、その翻訳本は思想的、政治的に問題があると言うことから、中国国内で最後の段階で出版を取りやめになるという事態になり、張玉林先生には大変ご迷惑をかけたわけです。

その後、南京大学社会学系に移られ、中国の農業問題の社会学的研究から出発して、次第に環境問題に深く立ち入り、しかもその視点は、ここで政治セッションに参加しておられることからもおわかりのように、公害紛争の只中に分け入って本質を切り裂き摘出するという、中国の国内でよくもこのような勇気の要る研究を身を削る危険を冒してまで敢えて行い得るものと思います。ですから、単なる抽象論やべき論で終わる方ではないという意味では、極めて貴重な先生です。

その次にお座りなのが毛里和子先生です。皆さんもよくご存じのとおりです。私は 1970 年代から毛里先生といろいろなかたちでお付き合いをさせていただき、ときには共同研究もしてきました。中国の政治、民族問題も含めて、国際政治、国内政治の第一人者で、日本を代表する研究者です。

続いて、臧志軍（ZANG Zhijun）先生です。復旦大学の政治学部の先生です。もともと 1993 年に、愛知大学に研修生として来られて、私のゼミに１年間おられました。その後、このように復旦大学で活躍されるとは思わずに、私はいつまででも自分の学生だと思っていたのですが、とんでもないことでした。今は復旦大学の政治学系の主任、

日本で言えば学部長をされています。その前任者は、ご存じのように王滬寧（WANG Huning：おうこねい）先生でいらっしゃいます。

最後に張琢（ZHANG Zhuo）先生です。私は学生時代、東京大学の富永健一教授の弟子でした。1994 年に、その富永先生が、張琢先生を東京大学に招いて講演会を開催することがありました。その折に、富永先生に、「君に会わせたい人がいる」と呼ばれて東京大学に行きました。そこで初めて張琢先生にお会いしました。そのころ、中国社会科学院の社会学研究所の機関雑誌の『社会学研究』の編集長をされておられましたが、その後も中国を離れるまでずっと編集長をされておられました。中国を離れた理由は、私が愛知大学に強引に呼び寄せたためです。現代中国学部をつくる際に、私の友人である張琢先生のお力をお借りしたいと思いお連れしました。以来ずっと、愛知大学でお仕事をしていただいています。その意味では、中国社会学の草分け的な方です。費孝通（FEI Xiaotong）先生と共に、初期の中国社会学を支えた人であると言っても過言ではありません。

長い紹介になりました。早速、報告に入りたいと思います。最初に金観濤先生、15 分ですので、本当に申し訳ありませんが、よろしくお願いします。

「『和諧』と『現代性』－ポランニー・パラダイムの再思考」

金観濤（政治大學）

各位學者，各位來賓：最近人們開始意識到全球化的太平盛世正遇到兩項基本挑戰。第一是全球暖化，經濟的高速發展有導致生態崩潰的可能性。第二個挑戰是金融海嘯引起的蕭條，市場機制似乎出了問題。在這樣的氣氛下進行關于和諧社會的討論是很有意義的。我想提供一點哲學的思考。

眾所周知，人們講和諧，都是立足於把社會視爲有機體。而現代社會是不是有機體？我們能不能用有機體的和諧觀來思考現代社會？這是人們很少想的問題。其實，關于現代社會、有機體和社會和諧之間的關係，一個值得注意的思考模式是上個世紀五十年代，由著名的社會學家博蘭尼提出來的。

博蘭尼的著作《巨變》提出了跟馬克思典範和韋伯典範都不同的另外一個典範。他認爲人類的社會都是有機體。或者說科技和市場都是從屬于社會的，故科技的應用跟市場的發展，必須是被嵌入在社會有機體中間的。爲此，他專門創造了一個術語「嵌入」(embeddedness)。該詞來自於采煤業，市場嵌入有機的社會，尤如煤礦存在於岩層。如果有一天，市場經濟和科技發展不再嵌入社會了，或者說它們要從社會有機體裏獨立出來，就會帶來非常大的問題。他稱之爲「脫嵌」(disembedding)。他指出， 19 世紀末正是發生了市場經濟的脫嵌，結果導致了社會對市場的反抗。博蘭尼用它來解釋法西斯主義和保護主義的興起，甚至第一次世界大戰和第二次世界大戰。

今天人們對博蘭尼著作的興趣又開始增加，美國建立了博蘭尼的研究所。我認爲，博蘭尼典範很重要，但他的思考邏輯是有問題的。關鍵在於：博蘭尼講的社會有機體實際上是傳統社會，現代社會不是有機體。現代社會的形成以及全球化的發生，恰恰是一個市場經濟和科技從社會有機體裏面「脫嵌」的過程。大家都會接受，現代社會和傳統社會的本質差別在於它是一個允許科技可以無限運用和經濟超長的組織系統，這對於有機體是不可能的。所謂有機體，強調人與人之間有機聯繫，把社會關係的正當性建立在某種一元的價值系統之上。而現代社會允許價值多元，人際關係可以因創造的需要不斷發生自主的改變；或者說，契約關係臨駕與其他社會關係之上，個人價值的自由成爲社會制度正當性最終根據。只有這樣，才有經濟的超增長和科技無限發展的可能性。因此，傳統社會的現代轉型，恰恰是市場經濟和科技發展從社會有機體中脫嵌的過程。

我認爲，如果檢討這半個多世紀以來社會科學、人文研究的進展，可以發現：它們在現代性起源的維度上，都證明現代價值之本質乃在於它們有